

『カレンダーの絵』

佐倉尚紀

校庭の片隅に

埋めたタイムカプセル

時を経て掘り出し覗いてみたら

それは光り輝く

ダイヤモンドになっていた

人はみな心にいくつかの

タイムカプセルを埋め込んでいる

過去という原石は

時の研磨剤によって

きらびやかな宝石に変貌する

私はタバコをふかしながら彼の話を聞いていた。演歌のメロディと歌詞が彼を酔わせているらしい。

私と彼とは、それまでは何の縁もゆかりも無かった。

一年程前の秋も深まったある夜、このスナックで偶然出逢った。

たまたま私の隣に座っていたのが、彼だった。お互い水割りを飲みカラオケでアルコールを飛ばしては、また飲んだ。ほぼ同じ年配と好みの似たカラオケソングがふたりを接近させた。私と同じようにひと仕事を終え、息抜きに寄ったこの馴染みのスナックでのことだった。

その後、彼とは何回かこの店で顔を合わせた。彼の名は、ママが「てっちゃん」と呼んでいるところをみると△てつや▽じゃないかと勝手に想像した。

ママは私よりひとまわりほど若いはずなのに、時には「コラッ！ てつ」などと親しみをこめたおどけるような言い方もしている。聞き上手なママの控えめな色香とチャーミングな笑顔とが、この店全体の清

潔で明るい雰囲気醸し出していた。客層もサラリーマンが中心で、彼もそうした中のひとりだった。自然の成り行き以外は、ことさらそれぞれの勤務先のことを話すこともなく、また、いちいち尋ねることもなかった。

私は彼のことを最初、よそよそしく「お宅は」などと呼んでいたが、慣れるに従いママに倣って自然に「てっちゃん」と呼ぶようになった。

その日、彼はめずらしく酒飲み話で私やママを相手に、「もう時効だよ」と照れるように言いながら、青春時代の思い出話を口にしたのだ。

晩秋の小雨降る夜のことだった。
.....

てっちゃんはなぜかカレンダーが大好きだった。

毎年秋になると、カレンダーがこれでもかと思うくらい店頭に並ぶ。その時節にな

るといつもワクワクするという。数字の大きさ、レイアウト、デザインや使い勝手などそれぞれ制作者の思いが伝わるようなカレンダーには、つい手が出てしまう。実用品でもあり装飾品でもあった。それで、新年を迎えたとき、てっちゃんの家ではいたるところに様々なカレンダーが吊るされることになるということだった。

いつの頃からだろうか、こうしたものが書店を中心に商品として並ぶようになったのは。今でもまだそうだが、昔はそれこそ銀行や化粧品店、酒屋さんなど各種の小売店さんがお歳暮用品としてお客様に提供しており、カレンダーなど買うものではなかったと記憶している。

その頃は柱掛け用の日めくりカレンダーが主流だったように思うが、土曜は青、日曜は赤、祝祭日は日の丸の旗が、それに日々の格言や大安・仏滅などの六輝が記された

定番ものが懐かしい。元日の朝、干支の描かれた表紙を丁寧に剥いで一月一日を出した時のあのすがすがしい気持ちは今でもはっきりと覚えている。それが一枚一枚めくっていくうちに段々と切りはがしにくくなり、扱っても少し乱暴になってしまう。止める部分の醜いほど厚くなり、逆に過ぎ行く日とともに薄くなる日めくりカレンダーは、時の移ろいを否が応でも感じさせてくれる。

また、一ヶ月・二ヶ月・三ヶ月・一年と一枚から十二枚に収めたものなどページ数も色々のものがある。日めくりと一枚ものとは、デジタルとアナログの違いがあるのかも知れない。

現在は趣向をこらしたデザイン華やかなものが多い。人・動物・植物・風景などの写真や絵画や書をあしらったものなど、店頭に飾られたカレンダーは実に多様であり新年を迎える風物詩でもある。

時期が過ぎれば破り捨てられ長くもつても一年、てっちゃんにはそんなカレンダーの中にも永久保存版にしたくなるような手に残るものがあつた。

彼が高校三年生の時、偶然に流行歌の「高校三年生」が爆発的にヒットした。だから高校時代の思い出はこの歌に象徴されるのだ。その頃、彼はある女性に恋をしていた。女性というより「少女」と呼ぶべきか。てっちゃんが彼女と出逢つたのは、高校三年生の時である。

彼女は、一年生。同じ高校の同じクラブの女子部に入部してきた。バスケットかバレーだったか、どっちのクラブだったかは、酔いのまわった私の記憶は定かではない。この場合それはどっちでもいいことだ、話に影響はない。男女別にそのクラブは存在していたものの、練習場は専用の同じ体

育館だからその部活動で一年間練習のたびに一緒になった。一年間といっても実際の部活動で顔を合わせる正味時間だけ考えればずっと短いのだが、少なくともてつちやんが卒業するまでは一緒だった。

人よりオクテだったという彼は三年生で初めて異性に目覚めた。

だが別に何も行動を起こしたわけではない。ほのかな憧れを抱いただけのことである。同じ練習場内にいるといっても、三年生と一年生、それも男と女とはそう和やかに話をする環境には無かった。その頃はまだバンカラ時代の片鱗もあり、一応先輩・後輩のケジメははつきりしていて厳しくもあった。伝統的に戦績が良かったこともあり、女の子に費やす時間があったら練習に励め、という自主規制みたいなものが受け継がれていたのだ。

そんな中では、恋心を抱いたものの行動に移すにはそれなりの勇気が必要だった。

てつちちゃんにはその一步を踏み出す強い意思と行動力と、少しばかりの凶々しさが不足していた。

三年の夏休み前には主要な大会も終わってしまい、実質的には後輩にバトンタッチされるので、少し時間と気持ちにゆとりが生ずる。他の三年生は、まあ一部ではあったが、下級生とデートしていた者もあり、それはてつちちゃんも知ってはいた。でも、もともと無口でむっつりとした表現能力に乏しい彼は、「体育会系だから文科系のクラブに入って、なよなよとしている奴らとは違うんだ」という思い込みが強く、女の子に興味があっても関心が無いような素振りをしていたのである。でも一番の原因は、恥ずかしくって面と向かって話が出来ないだけなのだった。

てつちやんがなんで彼女に憧れたのか明快な理由は聞き取れなかったが、ただ彼女の笑顔と全体の雰囲気はたまらなかったら

しい。前髪をおでこに少し垂らし、左右の髪は後ろに回して首のあたりまで伸ばしていた。色白の顔が運動するに従い頬がほんのりと上気してくる、健康的な子だったという。そんな彼女をじわりじわりと、気がつくほど好きになっていたのである。その子は真面目に部活動に参加していた。時たま姿が見えないとき、どうしたのかなと気になったりもしていた。

口下手なてつちちゃんは、部活の行事について複数の部員の前で必要最小限の話は出来ても、憩いのひととき、一人の異性の前のフランクな会話はダメだった。

教室で友人と楽しそうに話している彼女の横顔を見つめ、歩く廊下をこっちに気づいて目が合ったら恥ずかしいと思う気持ちと少しぐらい振り向いてくれないか、などと瞬時に揺れ動く思いを抱きながらも、余所見をして通り過ぎたあとの、あの残念で複雑な気持ち。十一月頃には全校で恒例のフォークダンスが運動場で開かれる。彼女

を探し求めるてっちゃんの目に友人と二人でいる彼女が目に入った。何度彼女に向かつて「踊ってくれ」とつぶやいたことか。

でもそれは、てっちゃんの中だけのシミュレーションに終わった。

またある時、廊下を歩いていたら遠くで男子とにこやかに話している彼女を見つけってしまった。彼女ともう一人の女の子と二人一緒にその男子と話していた。相手は彼女より一年上のスマートな奴だった。てっちゃんは嫉妬心と俺はやはりダメだなという弱気心とがごっちゃんになっていた。近くを通るのが嫌で遠回りしてしまった。

なんだかんだ葛藤しながら、とうとうてっちゃんは何も言えずに卒業してしまった。彼女が遠くの存在になるようで辛かったという。

「不器用なてっちゃんね」

ママは古典的なストーリーにもかかわらず、高校生の息子の相談に乗っているかの

ように、やさしそうな表情を見せていた。

私も心当たりがあった。今の若い人からみたら考えられないだろう。性差を超越したように気軽に付き合っている今の若い連中には、もっとシヤキツとしると思う反面、そのコミュニケーション能力には脱帽する。

だいぶ年を経てからであるが、私が企業の研修担当をしていた頃のことである。その頃、高校卒で就職する人がまだ多かった。

新人研修で三泊四日の合宿研修の時だった。朝六時から夜九時までの研修スケジュールを組み、消灯は午後十時半、起床は五時半と学生時間から抜け出させるため時間管理を厳しく指導していた。ところが彼らは修学旅行気分なのか夜遅くまで話し込んでいた。それも男子の部屋に女子が行ってである。叱るとその日は収まるが、翌日、またぞろ連中は集まり話が弾んでしまうのだった。私が心配するようなことを彼らは

意識しておらず、気軽に合宿生活の会話を楽しんでいたのであった。

私の世代は一部の進んだ奴はともかく、概ね男子は男子、女子は女子と別れて行動していたように思う。

世代間のズレを感じたひとコマでもあった。

さて、てっちゃんであるが、とにかく三月初めに卒業してからも彼女へのこだわりが続いた。先輩面をして部活に顔を出せば会えるのだろうが、それはそれでまた恥ずかしいのだった。

四月になるとてっちゃんは上京することになっていった。迷った彼は少し大胆な気持ちになった。

「このまま密かに自分の胸にしまいこんで離れてしまうより、やはり彼女に気持ち打ち明けよう」

と考えたのである。だが学校へ直接会い

に行く勇氣は無かった。今の若い子ならさしずめ携帯電話だろうが、残念ながらつちちゃんの家には当時まだ固定電話すら無かったのである。仮にあったとしても彼女の家の電話のことは知らなかったから同じことかもしれない。だが、住所だけはクラブの住所録から彼女の住所を書き写していたのだ。それは部活中の緊急連絡用に作成していたものだった。まだ純真だったつちちゃんは、別に悪いことでもないのに何故か、そんな部活の住所録を私用で利用するのに若干後ろめたさを抱いていた。でもそれが結局役立つことになったのである。

そして、「どうせ上京してしまうんだし」と考えた。

ここで、つちちゃんはまたもや照れるように言いよどみながら言葉を継いだ。

「生まれて初めてのラブレター、書こうと思った。そして書き出した。書きだしあたるの文句は今でも少しは記憶しているんだ」という。

それは何度も何度も書き直しては破り捨て、また必死に書いたためだ。歌の文句じゃないが、書いて何度も読み返し破っては書いてまた破り、捨てた便箋はすぐにゴミ箱一杯になった。こういう言葉は彼女がどう受けとめるだろうか、この表現は少しまずいとか、ちよつとこの文字は雑な字だな、などと苦心惨憺しながら自分の気持ちを訴えるべく必死で書いた。悩みながらのラブレター。これほど自分の気持ちを表現するのに苦労したことは無かった。

つちちゃんにとつてこの作業は人生史上画期的なことだった。なにしろラブレターを書いたのは、これが最初で最後だったから。封書も表書きを何枚か書き直してようやく中身を入れられるものに仕上げ、準備完了。

だがこれだけで全てが完了したわけでは無い。ポストに投函するのにまたつちちゃんは躊躇してしまった。封筒をポストの差出し口を持っていくがなんでもない所作が

誰かに見られているようで、なかなか指から封筒が離れないのである。やめようかと思つた。ポストから逃げてまた引き返すと数度繰り返した。最後は、後はもうどうにでもなれとやけっぱちになった。ポトン、というかカサツという音だったか、いずれにしろ間違いなくラブレターはつちちゃんの手元を離れていった。気持ちがスーッと吹っ切れた。まだ少し肌寒い三月下旬のことだった。

投函してからというものは、この手紙が彼女の手に届いたシーンを想像するだけでひとりでに胸が高鳴った。もうどうにでもなれと度胸を決めたつもりでも、手紙を読む彼女の顔が目に浮かび、心臓はひとりで騒ぎ出した。翌日、まだ届く日時でもないのにもう届いているかどうか気がかりになった。予想では投函した翌々日に届くだろうと推測した。明日だ明日だとつちちゃんは自分に言い聞かせた。

その日は、朝から落ち着かなかった。午

前十一時、ああもう着いているかな。学校は春休みだった。部活があれば午前中だが、手にするのは午後になるかと計算した。

午後一時、もう届いている頃だろう。もう見たかな？ 部活を終えて昼飯を食べて、それからの帰宅であればまだ見ていないかも。ストーリーがいくつも浮かんだ。

夕方四時。もう見ているだろう。でも友達と何処かへ遊びにいったってまだ帰ってないかもしれない。

夜八時。もう間違いなく彼女は読んでしまった。どんな顔をしてるだろうか。どんな気持ちで目を通しただろうか。嫌な気持ちになつたりしていないか。気がかりはどんどん膨らんだ。彼女が手紙をしたのは間違いないだろう。後はどんな返事がくるか、また全く無しのつぶてで終わってしまうのか、てっちゃんはこんどそのことが気になってしょうがなかった。彼が出した手紙には、返事が欲しいという明確な言葉は記していなかった。ただ自分の抱いてい

る気持ちを知って欲しい、そんな内容だったという。それは、臆病な気持ちからだ。返事がきて、「私は先輩のことを何も考えていません」と拒絶宣告をされるのが怖かったのだ。てっちゃんにとって死亡宣告に等しいことだからである。それなのに毎日、彼女に届いて、読んで、考えて彼女なりの気持ちをまとめてそれから返事を出すわけだからと、またまた勝手に日数計算をしていた。

今日か今日かと毎日のようにてっちゃんは待った。自分なりの到着日が一日一日と過ぎていくにつれ、「やはり」という気持ちが強くなってきた。

それでもどこかで期待していたのだが、てっちゃんの上京する日が近づいてきたにもかかわらず、とうとう彼女からの返事は無かった。彼女が間違いなく読んでくれたということだけで諦めるしかなかった。

ひよっこり街であつたら気まづくなるかな。黙っていれば、「ああ先輩、こんにちは」

と挨拶を交わしてもらえるものが、それすら出来にくくしてしまつたと思うと、てっちゃんは気が重くなった。

うす曇りの四月十日、ひよつとしたら思いもむなく電車は静かにホームを離れた。彼は取り返しつかないことをしたと悔いながら、ひとり寂しく過ぎ行く車窓に目を向けていた。彼女に出した手紙には上京後の住所は記していない。届いたはずの手紙は、きつと彼女の手で一瞥のもとゴミ箱へと捨てられてしまつたのだ。返事を出さないことが確かな返事だった。

これで彼女とは全て終わってしまった。十八歳のとっちゃんの初恋はこれで完全に終わってしまった。最初から最後まで一人相撲だった。一方的な恋心、叶えられぬ恋だった。

時代と共に恋愛方式も変化している。現

代の若者はもつとストレートのドライな感覚で恋愛ゲームを進めているだろう。てっちゃんのような情緒的な恋愛感情は、我ら中高年オジサンの青春時代の化石と映っているかも知れない。

さて、カレンダーの話に戻るが、てっちゃんに二十歳の頃、一枚のカレンダーを手にした。

それは上の部分に絵があり、その下に十二ヶ月の暦が印刷されていた。新聞紙を広げたくらいのカレンダーだった。一人暮らしの殺風景な部屋を彩り、壁の汚れを隠すのうってつけの大きさだった。

貼り終えてタテ横と曲がり具合を確かめながら、あらためて彼はその描かれた絵に目を止めた。そこには十三、四歳かあるいはもう少し幼いのか、ひとりの少女が描かれていた。左右のこめかみ部分の髪を後ろにおくり、それをリボンでとめ両肩まで垂

らした可愛い少女がいた。

色白のきめ細かな頬が少し上気したかのように薄ピンクがかっている。少女はフラフープのような輪を手にして立っていた。題名が小さく印字されているのが読み取れた。そこには、「輪あそびの少女」とあった。

画家の名前も記されていたのだろうが、てっちゃんは無頓着にも見過ごしていた。

てっちゃんが惹かれたのは、その少女が初恋の彼女に何となく似ていたからだった。高校一年の彼女より少女は子供だろうが、髪形、顔の輪郭、目元や雰囲気、てっちゃんには彼女を髣髴させるに十分だったのである。失恋の胸の片すみにまだ少し残像があったのだろう。遠い存在になった彼女が目の前に現れたような気がした。

それから一年間は間違いなくその少女の絵と一緒に過ごすことになった。部屋に入ると少女の目が自分を見つめているようにも感じた。

年が過ぎてもてっちゃんは、上半分の絵

の部分だけを切り残し、∧少女∨との∧同居∨を続けることにした。しかしその後、数回の引越しいつの間にかその絵を見失ってしまった。

そしてまた数年の時が過ぎた。

勤務する職場には、暮れになるとお歳暮が届く。ビールや酒、コーヒーなどの飲料品の他にカレンダーもあった。貰った品々は従業員数に合わせて分割し、それをくじ引きで持ち帰ってもらったのだ。偶然とは恐ろしいものだ。幸運は努力せずとも近づいてくる。てっちゃんはコーヒーセットとカレンダーを手にした。カレンダーには、一カ月ごとに巨匠の絵が印刷されていた。その中に、忘れもしない、あの少女の絵があったのだ。四月の欄にその絵はあった。懐かしい出逢いだ。Girl with Hoop」とそこに題名が記されていた。そして画家の名前も。ほろ苦い思いと懐かしさを足したような感触だった。

しかし所詮カレンダーの絵。またしても過ぎ行く年月には勝てず、日焼けし何回も止めなおした画鋏やセロテープ部分から、てっちゃんの初恋のように破れはて、またしてもどこかに消えていった。「やはり本物の彼女と同様、自分とは縁が薄かったのだろうか」と、てっちゃんは思った。

それからまた二十数年の時が流れた。てっちゃんは四十代半ばを過ぎていた。ひよんなきっかけで高校時代のクラブ員の一人と出会い、男女合同で同窓会を開くことがとんとん拍子に決まった。大半の人とは卒業以来の顔合わせである。当日、数世代の懐かしいクラブ員の顔が集まった。が初恋の彼女の姿はそこには無い。たまたま彼女の同期は連絡網が不備で対象外になってしまったのだ。クラブ活動の思い出話で盛り上がった会は、二次会、三次会へと続いた。最後に行ったスナックで、てっちゃんにとって驚くべき情報が耳に入ってきた。

それによると、てっちゃんが悩みぬいたあげく胸の内を打ち明けた彼女は、高校二年になる前に他県へ転校していったという。なぜ転校したかまでは分からなかった。きつと親の転勤か何かの理由だったのだろう。そこでハツとした。ならば家族全員で引

つ越したに違いない。アルコールに浸された頭をタイムスリップさせ精一杯思いを巡らした。ということは、自分が手紙を出した頃、彼女はすでに引越した後だったということにならないか。それとも手紙を見た後で引越したのか、もしかすると誰もいなくなつた彼女の家に配達されたのかもしれない。だが引越したあと転送されたのを見てくれる可能性もある。でも当時転送サービスがあつたのかどうか。それに転校するにはそれなりの手続きや準備が必要だろうから、春休みの時期はすでに引越しが終わっていたかも知れない。

やはり彼女は手紙を見ていない公算が大きいと考えざるを得ない。あの手紙はどう

なつたのだろうか、どこへ消えたんだろう？自分があの時、苦勞して書いたあの手紙は一体何だったのか。毎日毎日、待ち焦がれたあの気持ちは何だったのか。あらためて、一人相撲だったことだけは間違ひなくはっきりした。

だが待てよ、てっちゃんは考えた。見えないということなら完全に拒絶されたわけでもなかった、とも云える。そうだ、そう思えばまだ救われる。わずかな可能性を見出しそれに思いを託せば夢が蘇るじゃないか。こう考えた方が人生は楽しい。ならば彼女は今どこでどうしているのだろうか。元気であるだろうか。だが知りたくもそこまで知る術も無い。なんせ秘めたる恋なのだ。高校時代、間違ひなくあんなに身近にいた彼女が再び遠い存在になつた。

季節はとどまるを知らず流れ行く。

過ぎ去った恋の思い出は

それが強く記憶に

とどまっている時には

恋をしていた時にも劣らず

魂を奪うものである

ジャン・ルイ・ヴォイドワイエ

別れはまた逢う日の始め・・・

再会シリーズ 第1話

終わり

てっちゃんは色々と思いを巡らせた。な

らばと頭に浮かんだのが、あのいつしか消えたカレンダーの絵。後日、せめて絵だけ

でもと、画家名から画集などで探したが、

それらしき絵はどこにも見つからなかった。

美術館にも足を運んだ。インターネットの

時代になり、今度はしつかりと頭に刻みこ

んだ画家名「ルノワール」と検索するも、

少女の文字を冠した絵は結構あったが、肝

心の絵はあまり複製画が出回っていないの

か、あるいは探し方がまずいのか、お目にか

かることは出来なかったという。

時は晩秋。

今たけなわの店頭には沢山のカレンダーが並んでいる。そんな中で、絵画を用いたカレンダーを見つけると、てっちゃんはいまだ手が伸びてしまうという。だが、肝心のその絵とはいまだに△別れた▽ままの状態なのである。

彼は言った。

「昔から、逢うは別れの始めというけれど、しかし、今は、別れはまた逢う日の始めと思いたいね。人生は一瞬の出会いを活かすそれなりの努力が必要なのだ」

そう言い終わるとママに「高校三年生」をリクエストした。

「それなりの努力ねえー、身近かの女ごころを掴めないような男はだめよ。出世しないわよ」

ママはいたずらっぽい目で言った。

てっちゃんに投げかけた言葉が私にも痛かった。